

本学体育会運動部新入部員の実態調査

過去の運動部経験との関連から

中林忠輔・深町明夫

On Some Actual Situations of Athletes Who Freshman in Bunkyo University Athletic Association

Tadao Nakabayashi・Akio Fukamachi

I はじめに (目的とその背景)

本学の体育会は男女共学になり10年を経過し、組織も発足当時からみると安定度を増し、成熟期に入り、各部成績の向上に努力している。体育会に所属する各部は大学を代表する唯一の組織であって、チャンピオンスポーツを目指す集団である。しかし、チャンピオンスポーツを目指す上で、環境の整備は十分であるかと考える時、そこには様々な要素が考えられる。部を強くするための条件の一つに、どのような選手が入部してくるかといった部員の質に関わることがあげられる。本学にはスポーツに優秀な選手を優先入学させる手段はなく、一部の大学を除いた大多数の大学と同様に入学者の自主的な判断が最優先する方式である。競技で水準を高くしよう、保とうと思う時、部員のその競技経験が大きく影響してくる。しかし、大学進学者の増加、スポーツに対する社会的な関心に高まりのある現代社会の環境の場において、体育会へ対する様々な憶測等が相乗して、体育会本来の姿を学生自身が把握出来ていないという傾向が見られ、高校までの種目を継続させないで、他の種目へ転向してしまう学生が増えている。

その理由としてはスポーツが専門化するにつれて体力、技術水準が向上した、運動部は先輩、後輩との人間関係が厳しい等高校までの経験が負に働いているといった背景が存在していると考えられる。

本調査は所属部の経験年数について、またその種目を継続させるかとの調査をもとに、体育会へ入部して来た学生を対象に、高校までの部活動経験年数、高校での部の雰囲気、部活動に影響を与えたと考えられる高校体育教師に対する意識についての実態を把握することが目的である。

II 調査方法

1 対象

①文教大学体育会所属部員

1～4年生 男子121名、女子130名

②1年生 男子91名、女子128名

③1年生 男子92名、女子87名

2 調査期日

①昭和61年11月

②昭和62年7月

③昭和58年7月

3 調査内容

①(1)所属種目の経験年数

(2)所属種目の継続について

②(1)高校までの部活動経験

(2)高校までの部の雰囲気

③(3)高校体育教師のイメージ

Ⅲ 結果と考察

1 種目の経験年数

表1は体育会所属球技部を対象とした調査結果である。全学年対象として経験年数を見ると2年以上経験者にもかわらず男子77.7%、女子70.8%とその種目に限っては初心者がかかる割合を占めている。また集団、個人競技という観点からみると、女子よりも男子において顕著に個人競技に初心者の割合が高く見られる。

表2はまた学生時代に戻ったと仮定して、いまの種目を続けたいと思う継続者の割合である。男子については経験者の多い部が継続を希望する傾向が認められない。また20項目の態度を3段階評価した得点との関係からみると部に対する態度の高い部は経験者が多く、また継続を希望する者が多い傾向が見られた。

表3は調査②、③の運動部経験年数の結果である。中学、高校で運動部を経験した者は男女共に高い割合を示している。②と③の比較においては男子の未経験者の入部が減少した傾向があるのに対し、女子においては増加している傾向が見られた。

表4は調査②の運動部経験年数をA中学、高校から同じ種目を継続、B高校から継続、C高校まではことなる種目、D中学で運動部へ所属、E大学で初めての5つの観点からみた結果である。表3の結果から判明できなかった運動部経験によると、高校、大学と同一種目を継続している者男子44.2%、女子30.6%で、高校までは異なる種目経験していた者男子36.0%、女子38.7%の結果が明らかになり、経験年数といっても同一種目で見た限り継続者と転向者の割合は大体同じ値になっている。男子と女子の比較においては男子

がまだ中高継続者が異なる種目の転向者を上回っているのに対し、女子ではそれが逆転している結果が得られた。

①、②、③の調査結果を経験年数の観点から推察すると、同一種目の経験者だけの集団ではないことが明らかになった。その反面、初心者が多い集団かということと高校で異なる運動部を経験した者がかなりいる集団であるといえる。高校で運動部へ所属していたこと自体は競技の基礎となる体力の向上を継続してきたことで一様の評価は出来、大学から始めた者や中学時代だけの者とは全く違っている。しかし、高度の技術水準を必要とするチャンピオンスポーツを志向する部にしてはその種目に対する技術練習の不足など問題点が多く生じる要素になっていると考えられている。これらの要素が体育会全体の傾向である部成立から順調に上昇してきた成績が成熟された部の運営がなされている割に、若干の部を除いて停滞していることと関係がありそうである。

2 高校時代の部の雰囲気(1)

前項で述べたように、本学運動部は異なる種目からの転向者が同一種目継続者と大体同数であることから、入部動機に影響を与えた要素の一つとして高校時代の部体験の影響が考えられ、高校時代の運動部の雰囲気の中味を高圧的、温情的、親和的、わからないの4段階で選択させ、その結果を表5にまとめた。

高圧的と回答した者は②、③調査を比較してみても大体同率であり年次の差異は認められない。調査②から男子の継続者(高校から同一種目を継続)34.2%、転向者(現在とは違った種目)19.4%、女子では継続者11.8%、転向者25.6%であった。男子においては高圧的と答えた者の68.4%が継続者になっているのに対し、女子においては26.7%と男子と相反する結果がみられた。

本学体育会に入部してきた者の高校時代までの運動部の雰囲気は男子68.9%、女子

表1 部経験者の割合

	男子			女子			
	A	B	B/A%	A	B	B/A%	
集団競技6	91	78	85.5	4	80	55	68.8
個人競技4	30	16	53.5	4	50	37	74.0
合計	121	94	77.7	130	92	70.8	

A B B/A% A B B/A%

A: 部員数 B: 2年以上の経験者

表2 各部の経験者と継続を希望する者の割合

	部	男子		女子		
		経験者	継続者	部	経験者	継続者
集団競技	A	100.0	66.7	K	90.0	65.0
	B	95.2	85.7	L	86.4	50.0
	C	94.4	88.9	M	54.2	66.7
	D	75.0	92.9	N	35.7	42.9
	E	75.0	50.0			
	F	40.0	20.0			
個人競技	G	70.0	40.0	O	90.9	72.2
	H	66.7	50.0	P	75.0	55.0
	I	45.5	81.8	Q	64.3	78.6
	J	0	0	R	60.0	80.0

単位は%

表3 運動部経験(1)

	男子		女子	
	上(人)	下(%)	上(人)	下(%)
中高経験者	76	76	84	63
未経験者	10	16	27	17
合計	86	92	111	80

左: 62年度, 右: 58年度

表4 運動部経験(2)

	男子		女子	
	人	%	人	%
ア	23		18	
イ	15	44.2	16	30.6
ウ	31	36.0	43	38.7
エ	7		7	
オ	10	19.8	27	30.6
計	86		111	
マネ			16	
合計	86		127	

ア: 中・高校から継続
 イ: 高校から継続
 ウ: 高校で異なる種目
 エ: 中学で運動部経験
 オ: 未経験者
 マネ: 男子部のマネージャー

表5 高校時代の運動部の雰囲気(1)

	62年度						58年度	
	男子			女子			男子	女子
	継続	転向	計	継続	転向	計	計	計
高圧的	13 34.2	6 19.4	19 27.5	4 11.8	11 25.6	15 19.5	24 31.6	13 20.6
温情的	7	4	11	3	1	4	9	11
親和的	17	14	31	23	26	49	32	30
無回答	1	7	8	4	5	9	11	9
計	38	31	69	34	43	77	76	63

上段: 人 下段: %

77.9%とほとんどの者が温情的で親和的な部からである。次に高校までの部から転向した者に着目してみると温情的、親和的な部を体験した者の転向者は継続者と同程度にに対し、高圧的な雰囲気を経験したものの転向は男子において31.6%が他の種目へ転向し、女子は73.3%の者が他の種目に転向しており、男子よりも女子が高い数値を示している。このことは高圧的な部は部の組織、運営がしっかりしており、競技水準の高い部に顕著に表われる傾向であることから、入部後、部の中心選手、またはリーダーシップを取っている者と考えられ、彼らがいままでの種目から転向してしまうことは部の成績向上にとって負の要素に働いていると言える。それゆえに高校までの部体験が高圧的な雰囲気であった場合四つのことが考えられる。一つは運動そのものをやめて部へ入らない。二つはレクリエーション的クラブで運動を続ける。三つは他の種目へ転向する。四つはいままでの種目を継続する。のケースが考えられる。本調査では三番目のケースが多くみられ、積極型と消極型の間で男子がやや積極的、女子が消極的に近い行動を取る者が多かった。本年度レクリエーション的スポーツクラブへ入部した者が100名以上おり、その中にも高校まで組織、運営のしっかりした部を体験した者も多数いると考えられ、本調査対象以外にも運動部に関する限り、消極的な学生が増加している傾向が伺え、現代の多様化したスポーツの世界を反映している。

3 高校時代の部の雰囲気(2)

高校時代所属した部の雰囲気を(1)で高圧的と答えた者を対象に、継続者、転向者別に比較した結果が表6である。部の雰囲気をa下級生と上級生との関係、bキャプティンと部員との関係、c規則など遵守の程度、dチームワークの程度、e個人の練習への参加の程度、f部員全体の練習の参加の程度の6項目、さらにa、bについてはそれぞれ服従的な面、

親和的な面、尊敬的な面に分け計10項目について5段階評価で聞いた。

部の雰囲気が高圧的になるa₁、b₁、c、f項目をとりあげてみると、男女共転向者の方が高い値を示し、男子においては服従的な面で女子は規則など遵守の面で差がみられることからより高圧的な部へ所属していたと考えられる。このことは高校時代の部体験が転向をうながした影響の一要素として考えられる。

上述された結果をふまえてみると、男子と女子では部の雰囲気が異なっている。部の雰囲気としては対象者においては平均をほとんど上回ってかなり組織のしっかりした部体験をしている。大学の運動部へ入部する時、転向の動機にこの要素が影響されていかどうかはこの調査結果から結論は導き出せないが、おそらくそうであろうという推察はできる。

表6 高校時代の運動部の雰囲気(2)

	男 子		女 子	
	継 続	転 向	継 続	転 向
a 1	4.1	○4.5	4.0	3.9
a 2	3.5	3.2	2.8	3.2
a 3	3.9	3.5	2.5	3.6
b 1	3.9	4.3	3.5	3.9
b 2	2.9	3.3	3.8	3.7
b 3	3.8	3.8	2.8	4.4
c	4.2	4.2	3.8	○4.4
d	3.5	3.5	3.3	3.6
e	4.8	4.2	3.8	4.0
f	4.5	4.0	3.8	4.1
平 均	3.93	3.85	3.38	3.88
a 1 b 1 c f	4.19	4.25	3.75	4.07

それは、男子において服従的な上下関係、女子においては規則の遵守の厳しさが彼らの入部の際、負の動機として表われたと思われる。

4 指導者の影響について

高校時代の部活動は顧問制度が大学に比べ顕著に確立されている。しかし部活動の指導者がイコール教師でないことは事実であり、先輩、社会人等に指導を受けたという学生も多い。しかし、部活動を継続していく意志のある学生にとっては高校時代とは限らないが体育、スポーツに深く関心を持ち、その指導にあたられた教師の態度に何らかの関心をよせていることは事実でもある。本調査では、高校時代の体育の先生で一番印象に残っている先生一人について、その先生のイメージを聞いた。イメージの項目としては(1)ある競技で優れた経歴を持っている。(2)多くのスポーツに優れていて万能選手。(3)スポーツ技能の指導が上手だった。(4)運動部の指導に特に熱心で、強いチームを育てていた。(5)個人の人格を尊重して、親身になって考えてくれる教育者タイプ。(6)体育の理論的裏付けが豊かで、知識の面でも専門家だった。(7)自分の専門分野に対し献身的で、優れた職業意識を持っていた。(8)体育以外の専門分野についても高い見識をもった教養人だった。(9)人格者として人間的に尊敬できるタイプの人だった。(10)生徒と一緒にスポーツを楽しんでくれるタイプの人だった。(11)生徒指導やスポーツなどに情熱を注いでくれるタイプの人だった。(12)放任主義タイプの人だった。(13)いばるタイプの人だった。(14)何事につけてもきびしいタイプの人だった。(15)あまり勤勉なタイプの人ではなかった。の15項目である。

表7は結果を3段階で答えてもらったものを男女別、継続者、転向者別に集積し得点化したものである。男子の継続者については(1)、(4)、(11)が高い得点で、高校体育教科イコール部活動の指導者としてとらえている。女子の継続者については、(3)、(4)、(11)、(1)、(9)、(10)

表7 高校教師のイメージ

	男子		女子	
	継続者	転向者	継続者	転向者
1)	2.5 ○	2.3	2.4 ○	2.2
2)	1.8 △	2.2	2.3	2.1
3)	2.2	2.1	2.5 ○	2.5 ○
4)	2.5 ○	2.2	2.5 ○	2.2
5)	2.3	2.1	2.3	2.5 ○
6)	2.1	2.23	2.2	2.2
7)	2.1	2.2	2.3	2.5 ○
8)	1.8 △	2.0	2.1	2.1
9)	2.2	2.2	2.4 ○	2.3
10)	2.2	2.4 ○	2.4 ○	2.6 ○
11)	2.4 ○	2.3	2.5 ○	2.5 ○
12)	1.6	1.8	1.7	1.6
13)	1.3	1.4	1.4	1.4
14)	1.8	1.6	1.8	1.9
15)	1.5	1.4	1.6	1.3

が高い得点で、男子と同じ傾向の他、先生の人格的な面にまで渡っている。男子の転向者については、継続者を比較すると全体的に低い得点を示している。高得点をあげている項目は(10)で、部活動とはあまり縁のないイメージをあげている。女子の転向者については(10)、(3)、(5)、(7)、(11)の項目で高得点を示している。継続者との比較でも男子と異なり、同様のイメージを持っているといえるが、(7)、(10)で継続者と異なったイメージを持っていて、より高校教師に専門制とか人格面を強調している。

次にイメージの低かった項目を見ると、女子継続者、男女転向者には見られなかつたが男子継続者に(2)、(8)があげられ負のイメージに

なっている。このことはあくまでも体育教師を部活動の指導者と同じ感覚でとらえていると考えられる。

数量化して全体的にながめると上述された傾向になるが、得点の分布の仕方に継続者と転向者に特徴が見られ、継続者については、低いイメージが何人かいて、平均するとその数値になるのに対し、転向者は、分布が極端に高得点の者と低得点の者に分かれている。このことから体育教師が、転向者になんらかの影響を与えたとは断定できないが、そのような傾向は認められるものと考えられる。

V 要約

- ・本学体育会運動部は同一種目を高校時代から継続した者の割合が70%とあまり高くなく、一部の部においては50%を割る部も存在している。

- ・生涯スポーツの土台ともいえる、部活動で同一の種目をこれからも継続していきたい者の割合もあまり高いとはいえず、現在の部活動に対し、あまり積極的な行動をとっていない者も存在している。

- ・運動部経験をしている者は多いが、高校時代から継続した種目の部へ入部する者の割合はあまり高くない。特に女子部において顕著である。

- ・高校時代の所属した運動部は4分の3の者が温情的で親和的な部を経験している。

- ・高校時代高圧的な雰囲気を経験した者は男子は同一種目の部へ入部する傾向が認められるが女子においては顕著に入部を拒む傾向が認められる。

- ・高校時代高圧的な部を経験し、大学へ入って種目を転向した者は男子では雰囲気の中の上下関係特に服従的な面で、女子については規則などの遵守の程度で強いと答えた者が多い。

- ・継続者は高校体育教師に対し、部活動の指導者イコール体育教師というイメージを強く

持っている。女子の継続者はそれに加え、人格面でプラスのイメージを持っている。

- ・転向者は極端に良いイメージと悪いイメージを体育教師に対してもっている。男子はとくに先生のイメージを強く影響を受けていないようである。女子は強いイメージを持っているが、先生の人格面へ対してが強い。

以上要約したのが本調査の結果である。文教大学体育会へ所属する各運動部は対学的にも対学外的にも活動は高い評価を得ているが、各部が成熟するに従って、試合での結果は今ひとつである。組織もしっかりし、運営もきちんとなされ、熱心に練習はしているがその効果は結果としてはかんばしくない傾向にある。その原因の一序となっているのが入部してきた者の質の変化にあると考えられる。チャンピオンスポーツを志向する部にとってもっとも大切な事は優秀な選手の獲得にあるという事実は無視出来ない。制限された入学環境の中ですぐれた人材を入部させるには限度があるが、各部共その努力を惜しんではならないと思う。単に時代が変化し、転向者が増加したは、部そのものを継続しない風潮があるといっているのは体育会の存在そのものがあやくなる。また、本調査で明らかになったことであるが、スポーツにまるで初心者が入部していることはなく、基礎体力の出来た転向者の入部が多いのも事実である。そのことは本大学において、運動部に対し消極的である者が少ないことの証明でもあるといえる。体育会運動部が発展するにはこのような傾向に歯止めをかけ、高校時代までにつかかった種目を大学まで継続させるような、各部の努力を期待したい。

稿を終るにあたって、本調査だけでは不十分な入部動機、なぜ種目を変更したかについて、詳しく調査すると共に、転向者が現在の部でどのように活躍しているのかの追跡調査も今後の課題としてとり上げたい。最後になりましたが、調査に協力して頂いた体育会々

員の諸君にお礼を述べたいと思います。

参考文献

- 1) 松田岩男編, 運動心理学入門, 大修館書店, 1981, p213~231
- 2) 菅原禮, 体育社会学入門, 大修館書店, 1977
- 3) 花田敬一他, スポーツマン的性格, 不昧堂出版, 1972
- 4) 体育・スポーツ社会学研究会編, 体育・スポーツ社会学研究, 道和書院, 1982, p117~136
- 5) 中林忠輔他, 文教大学学生における余暇, 運動活動の意識に関する研究, 文教大学紀要第12集, 1978, p117~122